

三角形剛体粒子モデルの数式解説 (atom_vec_tri.cpp)

Open DEM Japan

2025年6月30日

離散要素法 (DEM) における三角形粒子は、面要素で構成される薄板剛体として扱うことができる。本ファイルでは三角形粒子一枚を剛体として保持し、その並進および回転運動をクォータニオンで更新する実装が示されている。以下では同実装に対応する基礎方程式を教科書的に記述する。

三角形剛体の質量密度を面密度 ρ [kg/m²] とする。頂点 (粒子内部座標) を

$$\mathbf{c}_1, \mathbf{c}_2, \mathbf{c}_3 \in \mathbb{R}^3$$

とし、粒子の重心 (ワールド座標) を $\mathbf{x}(t)$ 、クォータニオンを

$$\mathbf{q}(t) = \begin{bmatrix} q_0 \\ q_1 \\ q_2 \\ q_3 \end{bmatrix}, \quad \|\mathbf{q}\| = 1 \quad (1)$$

で表す。

■面積と質量 辺ベクトル

$$\mathbf{u} = \mathbf{c}_2 - \mathbf{c}_1, \quad \mathbf{v} = \mathbf{c}_3 - \mathbf{c}_1 \quad (2)$$

から三角形の面積 S は

$$S = \frac{1}{2} \|\mathbf{u} \times \mathbf{v}\| \quad (3)$$

で与えられ、質量は

$$m = \rho S \quad (4)$$

となる。data_atom_bonus() では (??) を用いて ρ から m を再計算している。

■剛体運動学 粒子座標系からワールド座標系への変換は回転行列 $\mathbf{R}(\mathbf{q})$ を用い

$$\mathbf{r}_k(t) = \mathbf{x}(t) + \mathbf{R}(\mathbf{q}(t)) \mathbf{c}_k, \quad k = 1, 2, 3 \quad (5)$$

で与えられる。 $\mathbf{R}(\mathbf{q})$ は

$$\mathbf{R}(\mathbf{q}) = \begin{pmatrix} q_0^2 + q_1^2 - q_2^2 - q_3^2 & 2(q_1q_2 - q_0q_3) & 2(q_1q_3 + q_0q_2) \\ 2(q_1q_2 + q_0q_3) & q_0^2 - q_1^2 + q_2^2 - q_3^2 & 2(q_2q_3 - q_0q_1) \\ 2(q_1q_3 - q_0q_2) & 2(q_2q_3 + q_0q_1) & q_0^2 - q_1^2 - q_2^2 + q_3^2 \end{pmatrix} \quad (6)$$

である。

■慣性行列 ワールド座標における慣性行列は

$$\mathbf{I}(t) = \mathbf{R}(\mathbf{q}(t)) \mathbf{I}_0 \mathbf{R}(\mathbf{q}(t))^{\top} \quad (7)$$

で得られる。ここで \mathbf{I}_0 は重心を原点とした本体座標系での慣性行列であり

$$I_{0,ij} = \rho \int_S (\delta_{ij} \|\boldsymbol{\xi}\|^2 - \xi_i \xi_j) dS \quad (8)$$

で定義される。MathExtra::inertia_triangle() では (??) を解析積分した閉形式解を用い、得られた 3×3 テンソルを Voigt 表記

$$\boldsymbol{\eta} = (I_{xx}, I_{yy}, I_{zz}, I_{yz}, I_{xz}, I_{xy})^{\top} \quad (9)$$

に変換する。Jacobi 回転により対称テンソルを対角化し、主慣性モーメント

$$\mathbf{I}_p = \text{diag}(I_1, I_2, I_3) \quad (10)$$

と主軸固有ベクトル

$$[\mathbf{e}_x \ \mathbf{e}_y \ \mathbf{e}_z] \quad (11)$$

を取得する。コード中では bonus[].inertia に (??) を、ex_space, ey_space, ez_space に (??) を保持し、必要に応じて右手系を保証するため

$$\mathbf{e}_z \leftarrow \begin{cases} \mathbf{e}_z, & (\mathbf{e}_x \times \mathbf{e}_y) \cdot \mathbf{e}_z > 0, \\ -\mathbf{e}_z, & \text{otherwise} \end{cases} \quad (12)$$

で符号を反転している。

■クォータニオン初期化 本体座標系主軸 $(\mathbf{e}_x, \mathbf{e}_y, \mathbf{e}_z)$ からクォータニオンを得るには

$$q_0 = \frac{1}{2} \sqrt{1 + \text{tr} \mathbf{R}}, \quad \mathbf{q}_v = \frac{1}{4q_0} \begin{bmatrix} R_{32} - R_{23} \\ R_{13} - R_{31} \\ R_{21} - R_{12} \end{bmatrix}, \quad (13)$$

を用いる。MathExtra::exyz_to_q() は (??) と等価である。

■動力学方程式 並進運動は

$$m\ddot{\mathbf{x}} = \sum \mathbf{F}, \quad (14)$$

回転運動は

$$\mathbf{I} \dot{\boldsymbol{\omega}} + \boldsymbol{\omega} \times (\mathbf{I} \boldsymbol{\omega}) = \sum \mathbf{M}, \quad (15)$$

で支配される。角速度 $\boldsymbol{\omega}$ とクォータニオンの時間発展は

$$\dot{\mathbf{q}} = \frac{1}{2} \begin{bmatrix} 0 & -\boldsymbol{\omega}^{\top} \\ \boldsymbol{\omega} & -\boldsymbol{\Omega} \end{bmatrix} \mathbf{q}, \quad \boldsymbol{\Omega} = \begin{pmatrix} 0 & -\omega_z & \omega_y \\ \omega_z & 0 & -\omega_x \\ -\omega_y & \omega_x & 0 \end{pmatrix}, \quad (16)$$

である。

■頂点世界座標の取得 接触判定や可視化に必要な頂点座標は (??) を用いて

$$\mathbf{r}_k = \mathbf{x} + \mathbf{R}(\mathbf{q}) \mathbf{c}_k, \quad k = 1, 2, 3. \quad (17)$$

■通信バッファとゴースト粒子 分割領域間通信では、実装上

$$\text{座標成分} : (x, y, z), \quad \text{クォータニオン} : (q_0, q_1, q_2, q_3), \quad (1)$$

$$\text{線形速度} : (v_x, v_y, v_z), \quad \text{角運動量} : (L_x, L_y, L_z) \quad (18)$$

を順にパックし、ゴースト粒子にも同一順序でアンパックする。size_forward や size_reverse は (??) の成分数に対応している。

■ボーナス構造体 bonus[] は三角形固有の追加物理量を保持する配列であり、

$$(\mathbf{q}, \mathbf{c}_1, \mathbf{c}_2, \mathbf{c}_3, \mathbf{I}_p, \text{owner id}) \quad (19)$$

を 1 要素として持つ。粒子が移動コピーされる際は

$$\text{copy_bonus}(): \triangleright \text{インデックス参照を更新} \quad (20)$$

して一意性を保つ。

■三角形生成の便宜関数 set_equilateral() は正三角形を粒子に割り当て、辺長 a を与えると

$$\mathbf{c}_1 = \left(-\frac{a}{2}, -\frac{\sqrt{3}}{6}a, 0\right), \quad \mathbf{c}_2 = \left(\frac{a}{2}, -\frac{\sqrt{3}}{6}a, 0\right), \quad \mathbf{c}_3 = \left(0, \frac{\sqrt{3}}{3}a, 0\right), \quad (21)$$

となり、面積 (??) や主慣性モーメント (??) も解析的に与えられる。

■メモリ使用量 粒子ごとの主要配列の総メモリは

$$\mathcal{M} = n_{\max} \sum_i b_i + n_{\max}^{\text{bonus}} b_{\text{bonus}}, \quad (22)$$

で算出され、memory_usage() は (??) を返す。ここで b_i は各配列 1 要素あたりのバイト数、 b_{bonus} は (??) 1 要素分のバイト数である。